

広島派遣を終えて

平和祈念文集

【平成 29 年度広島派遣中学生】

広島派遣を終えた後、派遣中学生は感想文を作成しました。

テーマは、「広島派遣を通して感じたこと、考えたこと」で、派遣を通して感じたこと、平和への思いが派遣中学生それぞれの言葉で述べられています。



我孫子中学校 2年 中川 孔明

「平和」、「命」とは何のことだろうか。みなさんは考えたことがありますか。常に続いている平和。常に進んでいる命。日々当たり前のようにあるものが、当たり前ではなくなる日はくるのでしょうか。そんなことはあってはいけない。しかし、当たり前のことが当たり前ではなくなる日がきてしまいました。

今から約70年前…。

広島にはなにがあるのか、どのような場所なのか何も知らなかったことから、朝から楽しみが沢山ありました。1日目、原爆被害の説明、慰霊碑ガイド、国立広島原爆死没者追悼祈念館の見学などがありました。最初に当たり前のことが当たり前の日ではなくなる日はくるのでしょうか、と書きましたが、約70年前の8月6日、午前8時15分その日がおとずれてしまいました。そんな、日本を襲った原爆の被害についての説明をうけて、僕が大きく印象に残っていることが2つあります。

1つ目は、被害による影響です。爆心地である広島は、主に3つの影響を受けています。「熱線」「爆風」「放射線」の3つです。「熱線」は、爆心地の上空600mで爆発し、被害をあたえた。熱線によって体全体を大やけどした人もいます。ある人は、1年9か月の間苦しみながらも一命をとりとめました。

「爆風」は、熱線よりも被害が大きかったといわれています。風によって家のほとんどが飛ばされてしまった。また、風の温度によってやけどをした人もいました。

「放射線」は、黒い雨として人々の体にしみこんでいった。放射線による、最も被害の大きなことは、放射線が、がんや白血病の原因となることです。何人かの人々は熱線や爆風の被害からは助かることができます。しかしながら、黒い雨をあびてしまい、がんなどが原因で亡くなってしまっている人もいます。このように原爆を投下されたことにより、計14万人をこえる大きな被害をあたえました。このようなことは、二度とおこってはいけないと考える日本のため、平和をつくりたいという世界のためにこれからも協力をしていきたいと思いました。

2つ目は、アメリカが目標とした原爆投下の地点です。アメリカは原爆投下の目標を日本としました。4月27日に17地域を目標地としました。その地域

のなかには、東京・名古屋・大阪などの3大都市圏といった地域があるなか、広島市も1つの目標としてあがりました。そして8月6日の午前に第1目標が「広島」に完全に決定しました。また、第2目標を「長崎」に決定しました。このようなことから疑問がいくつかがあがりました。何故、日本だけが目標としてあがってしまったのか。その答えは、個人の考えだと、核兵器をもっていないからなのではないのではと考えています。しかし、まだ完ぺきな答えが分からないので調べていきたいと思いました。そして、何故日本が目標となってしまったのかの答えをしっかりと理解したいです。

2日目、広島平和記念式典に参列しました。平和の誓いの言葉、平和宣言など平和を目標とした意味の深い言葉を聴くことができ、すごく心の中に残りました。とうろう流しでは、平和を起点として願いをこめて流しました。願いが叶ってほしいと思いました。また、そのように願いをしているなか、とうろう流しで最も印象に残っていることは、夜の景色とあった光の色具合です。夜のなか、違う色のとうろうが1つに集まって光っていて、ものすごくきれいでした。願いはしっかりと叶ってほしいです。

3日目は、被爆体験講話の聴講がありました。そのなかで印象に残っている言葉は「あきらめてはいけない」です。どんなときでも、どんな状態であってもあきらめずやり切ることが大事だと思いました。

僕は3日間を通して「平和」と「命」についてしっかりと学ぶことができました。個人で考える、思う「平和」、「命」は、いつまでも当たり前のように続くことではなく、常に何かと戦わなければいけないものだと思います。みなさんにとって「平和」、「命」とはどんなものですか。



我孫子中学校 2年 西村 百夏

私はこの広島派遣に行く前、原爆はなんかすごかったんだろうなという漠然な考えしか持っていませんでした。ですが今回の派遣で、原爆の恐ろしさや、残酷さ、加えて戦争はもうしてはいけないという強い考えが私の中で芽生えました。

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式で、こども代表の方が言っていた「感情までも奪われた人がいたのです」という言葉に私は胸を刺されるような感覚を覚えました。私が1945年8月6日に生きていたらどうだろうと想像してみました。一瞬で街がなくなり、もし自分が生きることができたとしても、親や兄弟は死んでいる、クラスメートが男か女かもわからないほどむごい姿でいたらと思うと胸がしめつけられました。それこそ感情をなくしてしまうだろうと思います。ですが、これは私の想像です。実際は私が想像することもできないほどのすさまじい体験だと思います。

それは中西 なかにしいわお 巖さんの被爆体験講話を聴いて感じたことです。中西さんは講話の最初に「できるなら話したくない。話すと心が痛くなる」とおっしゃっていました。中西さんは15歳のときに被爆したこと、中学3年生のときに学校ではなく陸軍被服支廠に通うようになったこと、原爆投下翌日の街の匂いが人間の死体で臭かったことなどを話して下さいました。中西さんは途中「忘れない、だけど忘れられない、忘れてはいけない」とおっしゃいました。それほど原爆は酷く、被爆者の方々の心にも身体にも大きな影響をあたえたと言う事がわかりました。中西さんは最後に「平和の原点は人間の心と心の触れあい」とおっしゃいました。私たちは今「心と心の触れあい」をしているのでしょうか。次の世代を担う私たち若者が平和をつくっていかねばならないと強く思いました。

私がこの派遣でとても印象に残っているのは、実際に被爆の方が描いた「絵」です。写真ではリアルに被害の状況を見ることができますが、あまりにもひどいとシャッターを押すことができず、後世に残りません。ですが絵では、当時の白黒写真では表せない色や言葉も紙に書くことができるのでわかりやすく、今でも多数の絵が残っています。

- 衣服が引き裂け皮膚がたれさがっている絵

- 少年の眼球がとれている絵
- 子どもが家の下じきになっている絵
- 防火用水槽の中に大量の死体が入っている絵
- 赤ちゃんを胸の下にかばい死んだ母親の真っ黒な死体の絵
- 家族で衣服が燃えてなくなり川の方へ逃げている絵
- 死んだ赤ちゃんに呼びかけている母親の絵
- 赤ちゃんが死んだ母親の胸にしがみついて死んでいる絵

どれも私が衝撃を受けた絵の数々です。私はこれらの絵によって広島で起こった悲劇をより深く知ることができたと思います。絵には、当時生まれていなかった私たちのような若い世代にも伝わる大きな力があると感じました。

平和については関係ないですが、広島はとても暑かったです。事前学習のとき市長さんが「せみの声を聴いてみてください」とおっしゃっていました。現地に行って聴いてみると我孫子のせみの声よりうっとうしいような、暑さが倍増するようなせみの声でした。そして広島は何もしなくても汗がでるようなじりじりした暑さでした。我孫子に戻って広島の暑さに似ているのをみつけました。それは、「駐車場」です。スーパーなどの駐車場は熱がこもっていて暑く感じますが、私はその暑さが広島の暑さに似ていると思いました。

私にはまだ少しの知識や学力しかありません。こんな頭でも、平和について、戦争について、原爆について、たくさんの事を考え、新しい考えを持ち成長することができたと思います。私が大きくなってたくさんの知識を持ち、物事をより深く考えられるようになってからまた広島に行きたいです。そうすれば、また考えも変わるだろうし、世界のこととかも広い視野でみられるようになる気がするからです。次行くまでに、たくさん勉強して頑張ります。



湖北中学校 2年 市川 凌

ぼくが、この広島派遣という貴重な体験で、印象に残った事は3つあります。

1つ目は、被爆体験講話です。被爆体験講話では、その被爆者の当時の状態が鮮明に想像できたので、その時のつらさや恐ろしさ、悲しさなど、すごく想いが伝わりました。これからは自分たちが、いろいろな人に平和について伝えていかなければいけないと、実感しました。また、被爆者の人数も減っているのも、貴重な体験ができたので、よかったと思います。

2つ目は、広島平和記念資料館を見学したことです。広島平和記念資料館では、原爆投下への道筋やその後の世界の動きなどがわかりやすく書いてありました。その他にも、タブレットのようなもので、自分で詳しく調べられるものもあったので、とても勉強になりよかったと思います。

3つ目は、広島平和記念式典に参列したことです。広島平和記念式典では、多くの人々が参列しており、その中には、外国人の人もいたので、みなさんが平和を祈る気持ち、そして核をなくすために努力して行く姿に、心を動かされました。

しかし、現実核がなくならないのは、なぜなのか、僕は疑問に思いました。日本は、毎年広島や長崎で平和記念式典などのいろいろな活動を通じて、核兵器の悲惨さを世界に伝えています。それなのに核を持っている国は核をなくそうと努力はしていません。

核兵器を持っている国の考え方は、核兵器を持っていることによって、他の国が攻撃するのを思いとどまらせる事ができると考えています。そして、核兵器を持っていることによって平和を保つことができ、戦争を防ぐことができると考えています。それは、1つの考え方としては、理解できます。日本も現実アメリカの核兵器に守られています。

しかし、もし核兵器が実際に使われてしまったら、その被害は、広島や長崎をはるかに上回るものとなってしまいます。核兵器を使った後の世界は、放射能で汚染され植物や生物が育たなくなり、人間も何十年にもわたって後遺症に苦しむことになります。もちろん直接被害を受けた人は、広島や長崎のように爆風を受けて即死したり、やけど状態で亡くなる人もいます。

したがって、このような世界には絶対になってほしくないのも、そのために

は、僕は核兵器をなくしていったほうが良いと思います。

今年、核兵器禁止条約が採択されました。この条約は、核兵器をなくすことを目的として作られた国際条約です。ただ、その会議には、日本は参加しませんでした。本来、日本は、世界に1つだけの被爆国なので、参加すればよかったのではないかと思います。しかし、核を持っている国は、参加しませんでした。なので、すぐに核兵器はなくすことは難しいと思いました。

ぼくは、この広島派遣を通じて色々な事を考えさせられました。ぼくは理想と現実とは、すごくかけ離れた事だと思います。広島や長崎の人の思いは、この世界から核兵器をなくすことです。しかし、現実はそうではありません。現実には、核を使って思いとどませようとし、もしかしたら核を使ってしまうかもしれません。これからは、少しずつでも理想と現実をつなぎ合わせるように、現実を受け止め、行動し理想も大事にしていきたいと思います。今回の広島派遣をきっかけに、広島や長崎の人々のこと、原爆のこと、世界平和のことについてももっと勉強しなければならぬと実感しました。これからの活動にしっかりとつなげていきたいと思っています。



湖北中学校 2年 高須 万悠香

私は、戦争や平和への理解、考えを深めたいという思いで広島派遣に参加しました。

1日目、初めて原爆ドームを生で見ました。その時には、そこに原子爆弾が落とされたというのをあまり感じませんでした。今までテレビや本で見ていたものが、ただ自分の前にあるだけでした。その後、原爆被害の概要説明を聴き、慰霊碑ガイドをしていただきながら、もう一度原爆ドームを見ました。その時には、原爆ドームがおそろしく感じるようになっていました。そこに原爆が落ちたことを感じられるようになりました。「広島に原爆が落ちて、たくさんの命がうばわれた。」そのことは、もちろん知っていましたが、実際にそこで話を聴くのと、知っているのでは、全く違います。そのことを実感しました。

次に、国立広島原爆死没者追悼祈念館に行きました。私は「被爆者の心理的影響について」という資料を読みました。その中で、特に心に残ったのは、罪の意識と羞恥心です。助けを求める人や肉親を守れなかったのに、自分が生き残ったことに対するものと書かれていました。自分が生きていることさえも喜べない状況など、想像もできません。原爆が落ちて、やけどをしたり、病気になったりするだけでも、おそろしいことです。それなのにも関わらず、人の心までもうばってしまう原爆は、おそろしいの一言であらわすことができません。

2日目は、広島平和記念式典への参列から始まりました。式典の中で、小学6年生の方が平和への誓いをするものがあります。とても心に響きました。「広島には当たり前の日常があったのです」その言葉を聴いて、私は、広島に原爆がおとされたことだけを見ていた、と反省しました。原爆投下の前、広島にはたくさんの草木があり、たくさんの建物があり、たくさんの笑顔がありました。当然のことです。しかし、そのことを理解して、より原爆がうばったものの大きさを感じました。同時に、小学6年生の頃、私はこんなことを考えられたのかと思いました。たくさんの人の心に響く、事実をみつめた、決意の文章。きっと無理でした。中学2年生になった今でも、考えられたか分かりません。それだけ、今の広島の小学生在が、過去のことを重く受け止め、未来に伝えようと学んでいるのだろうと思いました。

次に、袋町小学校、本川小学校を訪れました。この2つの小学校は、72年前、実際に被爆した建物です。今、自分が立っているここで被爆した方がいる、亡くなった方がいるということを感じて、こわくもありました。来ないと分からないということを感じました。

3日目は、実際に原爆の被害にあわれた中西さんのお話を聴きました。中西さんは当時15歳で、爆心地から2.7キロの工場で被爆されたそうです。その日の朝、中西さんは爆心地から500メートルの工場に向かうはずでしたが、トラックがこなかったため、もとの工場にいたそうです。それが1つめの幸運だったと語っていました。投下された瞬間は、目の前が急に光って、たつまきに吸いあげられるような感覚だったそうです。目立つ傷がなかった中西さんは、介抱の手伝いをしましたが、どうすることもできなかつたとおっしゃっていました。夕方、中西さんは家に帰ることができました。兵隊になった父以外の家族は全員無事で、森の中に逃げこんだそうです。次の日、中西さんは家族で親戚を探しに行かれましたが、お母様のご決断で、3～4時間ほどで中国山地まで逃げられたそうです。それが、もう1つの幸運だったといえます。広島は当時、放射能で汚染されていました。ずっと広島の中において、原爆症にかかってしまった方もいたそうです。また、生き残った方の悲劇として、集団そかいしていた小学生のことを教えてくださいました。そかい先では、大好きな家族とも会えません。あと少し、あと少しで会えると我慢していた少年少女が広島に戻った時、住んでいた家も、会いたかった家族もいません。混乱した状況下で、誰にも助けてもらえず、寒さとうえで亡くなってしまった子が、1,000人もいたそうです。わたしは、中学2年生でも、そんなことにはたえられないと思います。そのお話を聴き、今すぐ家族に会いたいと強く思いました。私は、広島にいる間も、こまめに家族に連絡をしていました。それもできなかつた時代です。それも、ずっと長い間です。急に、自分以外がいなくなる、想像したくありません。死んだほうが良いと思ってしまうかもしれません。

中西さんは、どんなに努力をしても、戦争が始まれば全てを否定される、あるのは死のみとおっしゃっていました。日本は今、戦争をしないと誓っています。しかし、戦争の種はどこにでもあります。生きている1人1人が、平和について考えることが大事だと思いました。



布佐中学校 2年 服部 琉佳

私は、我孫子市平和事業の広島派遣中学生の団長を務めさせていただいた、布佐中学校二年の服部琉佳です。

私は今回の派遣で、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式典への参列や広島平和記念資料館の見学などを主にさせていただき、2泊3日という短い期間でしたが、派遣仲間ともとても仲良くなり、戦争の悲惨さや平和の尊さなどを肌で感じる事が出来ました。

今から72年前、1945年昭和20年8月6日午前8時15分、広島町に一発の原子爆弾、通称「リトルボーイ」が投下され、多くの人々が生活していた広島街は一瞬にして焼け野原と化し、強い熱線や爆風、放射線が放たれて甚大な被害をもたらしました。この原爆が原因で亡くなられた方々の総死者数は約14万人にもものぼり、これは当時の広島市の人口の約半分に値し、この約14万人という数字の中には、アメリカ系捕虜や東南アジア諸国から来ていた留学生なども含んでいて、多くの被爆者は障害を患い昭和20年末で一旦おさまったかに見えたが、一命をとりとめた人々にもその後、「ケロイド」が生じたり白血病やその他のがんの発生率が高くなるなどの後障害が現れ、昭和21年以降から現在に至るまで続いていて、今もなお苦しんでいる方々がいます。

私はこのような内容を資料館などで他にもたくさん見たり聞いたりしてきましたが、その中でも特に印象に残っていることは2つあります。

1つ目は広島平和記念資料館や袋町小学校平和資料館、本川小学校平和資料館へ行き、最も事実に近い内容を知れたことです。私は広島派遣に行く前の事前説明会で市長に「実際に広島に行き私がたくさんの方々に12月の発表会やリレー講座などを通して、私達若い世代に伝承していきたい」と言いました。そのためには、正しい事実を学びそれを踏まえた自分の意見をしっかり持つ事がとても大切だと私は思います。しかし、実際に被爆者の方の話を聞くと、当時はまだ幼く物心がついていなかったから正しい記憶ではないが、色々な事を見たりして思い出しながら話をしている、と言っていました。それは私達も同じだと思います。実際に戦争に関わった訳でもないし、被爆者でもないからその場がどんな様子だったかは、想像するしかない。しかし、その想像が、これからたくさんの人に伝えていくには必要だし、被爆者の方の思いは自分たちが伝

承していくことは可能だから、今自分に出来ることをしていきたいと思えました。

2つ目は自分が広島平和記念式典に参列し「平和」とはなにか、についてより深く考えさせられたことです。私は、小学6年のときに派遣中学生の先輩方からリレー講座を受けて、そこで初めて「平和」というものについて考えさせられ、それまでは8月6日に広島県に原爆が投下されたことすら知りませんでした。それから私は、戦争に関する記事を集めていくと原爆というのを知りました。しかし、自分は無知だから調べ方も限られてくるし、行動力も無かったけど、今思い返すとそれだけでも先輩方が望んでいた若い世代への伝承だったのかも知れません。だからこそ、リレー講座を受けたことのある派遣中学生である私が、被爆者の方々や先輩方の思いを込めて伝承していく必要があります。

そして、私がこの派遣で考えた「平和」とは、「理想と現実を常に行き来し、今いる自分の環境をあたりまえだと思わない」ことです。

これは、被爆者の中西さんの言葉を一部引用していますが、平和というものは常に理想を持ち続けることが大切だけど、現実はそううまくはいかないから、常に2つ考える必要があるという事です。私はこの事を知ってとても共感出来、同時にこの事をもっとたくさんの人々に伝えていきたいと思いました。

私は今回の派遣を終えて、今自分が思っていることや感じたことを早く皆に伝えたいと一番に思いました。被爆者の方の人数は年々減ってきているし、話してくださる方の中にも本当は話したくないし、思い出したくもない方もたくさんいます。その中でも、私は実際に被爆者の方のお話を聞いたのは、とても貴重なことだから、派遣から終わった後もリレー講座や12月の発表会などを通して、今自分に出来ることを精いっぱいしていき、若い世代へと伝承していき、1人でも多くの方に「平和」というものの尊さや戦争の悲惨さを知ってもらいたいです。その第一歩として、周りの友達や家族に伝えていきます。



布佐中学校 2年 柵木 愛

広島派遣1日目は、広島平和記念資料館で広島中・高校生ピースクラブに参加しました。最初に原爆被害の概要説明を受けました。内容は、原爆が投下されたのは、1945年8月6日8時15分、投下するのを広島にした理由、4月頃からどこに投下するか何ヵ所か決めていたこと、原爆のもつ3つの力、放射線の恐ろしさ、広島の復興、などでした。事前に覚えていた内容もあったので、もし自分が被爆したら、と被爆者の気持ちになりながら話を聞くことができました。説明を受けた中で私が驚いたのが、広島の復興の中で活躍したのが兵士や商人ではなく、女生徒だったという事です。路面電車を復活させ、お金がない人には無料で電車の利用を許した、広島の女生徒はすごいと思いました。自分も被爆し、苦しい環境にあるのに、人に優しくできるのは、本当にすごいことだと思いました。

次は、2グループに分かれ慰霊碑ガイドを広島の高校生、大学生にしてもらいました。最初に「嵐の中の母子像」を見ました。母と子2人の像で、母は赤ちゃん1人を抱きかかえ、もう1人の子を後ろで支える様に、原爆の熱線、爆風から子を守っている様でした。像の母はたくましく、母の愛を感じられました。次に「被爆アオギリ」を見ました。もともと爆心地1.3kmの所にアオギリはあり、当時「70年は草木は生えないだろう」と言われていた広島市民にとって、とても大きな希望でした。「アオギリ2世」は外国にもあるということ、「アオギリのうた」があるということを知り、アオギリはとても大切にされているんだと思いました。

国立広島原爆死没者追悼祈念館とおりづるタワーは、体調が悪く見学することができませんでした。

広島派遣2日目は、広島平和記念式典の前に、被爆したという女性の方に運よく少し話を聞くことができました。その女性は、80歳を超えていましたがとても元気な人でした。当時14歳くらいで被爆し、「いってきます」と言ったのが家族との最後だったと言っていました。原爆が投下された時、屋外にいたため助かったそうです。これだけしか話は聞けませんでした。話して下さった時の顔は、私たちに向けて笑顔でしたが、やっぱり悲しそうな目をして、私たちと同じ歳ぐらいの時に家族を失ったらどんな気持ちになるか、とても考え

てしまいました。最後にその女性は、私達に「がんばってね」と言ってくれました。被爆者の方とお話する貴重な体験ができ、本当に良かったです。

広島平和記念式典で最初に驚いたことは、式のしおりの内容全てが、日本語と英語になっていたことです。一般の人でも外国の方はたくさんいるということに改めて気付きました。次に驚いたことは、こども代表の平和への誓いです。大人の言葉とは違い素直な言葉が、聞いていた全ての人の心に響いたと思いました。式の中で一番印象に残りました。

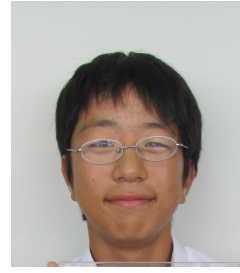
次は、折り鶴奉納です。原爆の子の像周辺にはたくさんの方がいて、中には外国のカメラマンもいて、世界中が平和になれる日は、そんなに遠くじゃないのかな、と思いました。奉納された折り鶴の中に千葉県からのものもたくさんありました。

次は、袋町小学校平和記念資料館の見学です。袋町小学校は、爆心地から460mの所にある学校で、学校にいた当時の生徒のほとんどが一瞬で死んでしまったそうです。当時伝言として使われていた壁、被爆により壊れた扉を見ることができました。

本川小学校平和記念資料館では、寒気を感じる様な写真、物がたくさんありました。死体の火葬場の写真、防空壕の写真、花こう岩に印された被爆者の影の写真、傷だらけの市民の写真、当時の水が入ったままの溶けたガラスのビン、など衝撃を受ける物がたくさんありました。地下は、被爆し亡くなった人がまだここでさまよっているのか、と思うくらいに何かを感じました。

次は、広島平和記念資料館を見学しました。ここが一番衝撃を受けました。原爆によるケガをもった人々の写真がたくさんありました。毛が抜けた少年、大火傷の人、死の斑点がでてきた兵士などです。このような写真を見れば誰でも、原爆の恐ろしさを一目で理解できると思いました。私はここで、放射線の仕組みをきちんと理解することができました。目に見えないのにどうやって人を傷つけるのだろうと思っていたのですが、体の細胞を壊すと知り、自分が知らない間に体を壊すというのはとても卑怯だと思いました。

広島派遣3日目は、雨で広島城ではなく、広島平和記念資料館を見学しました。ここでは、今、日本が核兵器のない世界を実現させるために何をしているか少しだけ知ることができました。それは抗議文というものでした。私が見た限りでは、核実験をした後にその国に向けて「核のない世界」と伝えるものでした。



湖北台中学校 2年 桐山 悟至

私は8月5日を楽しみにしていました。原爆・戦争に関する色々なことが身をもって体験できるからです。

5日、我孫子から約5時間、広島に到着。思った以上に大都会で、思った以上に街が赤くて驚きました。まず「8月5日事業」に参加。同年代の人が原爆の事を詳しく教えてくれ、また、8月6日、あの日で広島はどう変わってしまったのか、また原爆によりどのように人体に影響が出たのか、どれほどの人が亡くなってしまったのかが痛いほどよく分かり、二度とくり返してはならないと思いました。その後、ガイドの大学生のお二方と慰霊碑をめぐる。数が多くて、亡くなってしまった人が多いと感じました。また、8月5日事業で同年代の人が、分かりやすく教えてくれていたり、歩いている途中でも署名活動をするなど、行動力が高いなと思ったり、我孫子と違い凄いな、と思いました。その後、おりづるタワーへ。12階から見た広島の景色を見て「70年でここまで復興するなんて、広島力は凄いな！」を驚くと同時に、「この景色を、今度は自分達が守る番だな」と思いました。

2日目、まず平和記念式典に出席。平和宣言の時、広島市長が言った「(核で)惨たらしい目に遭うのはあなたかもしれません。」や、『被爆者の体験に根差した「良心」への問い掛けと為政者に対する「誠実」な対応への要請を我々のものとし、世界の人々に広げ、そして次の世代に受け渡して行こうではありませんか』というこの2つの言葉に共感しました。1つ目の言葉では、今、北朝鮮も核を持っており、テレビでも核戦争と耳にするようになり、いつ始まってもおかしくない中、もしかしたら来年には被爆しているかも、もしくは死んでいたりするかもしれない、そう考えると、発言は正しいと思うし、だからこそ1秒1秒をしっかりと生きたいと思いました。

その後、千羽鶴を奉納しました。台中生全員分の思いと願いを込めて、平和が続くという思いを込めて、奉納しました。次に、原爆ドームで記念撮影。改めて見ると、思った以上に小さいのが印象的でした。また、爆心地側はほとんど焼けており、残っているのは川の方だけだったので、原爆の力は恐ろしいと感じました。また、式典前の事です、警察に対して、安倍総理に対して、暴言を吐いているのを聞いて、これが今の日本なのかと、違う恐ろしさを覚えました。

袋町小学校を見学していると、2階に、今この学校に通っている人達が書いた新聞があり、色々と分かりやすく書いてあるので、これは良い、という事で自分達も書く事を検討してもらいました。また、たくさんの千羽鶴が奉納してあって、気持ちはひとつなんだと実感しました。

お好み焼きをおいしく食べて、本川小学校へ。ガイドさんによると、まだ生きておられるトヨ子さんが、高木さんが原爆投下で黒こげになって死んでしまっても、こわい、恐ろしいと感じない事に、また、街が、学校が、なくなっても、何の感情も抱かなかった事に原爆の恐ろしさを覚えました。だって、友が目の前で死んで行っても、何も思わない事から、極限状態だったと分かります。

夜、とうろう流しでは、100個以上のとうろうが流れたのを見て、平和が続きますようにと心の中で訴えました。とてもきれいで、ずっと見ていたい、そんな風景でした。

3日目はあいにくの空で広島城は中止になったので、被爆体験を聞きます。お話だと、きのこ雲の下には35万人がいたという事です。地ごくのような熱さだった。原爆が投下されるまで空しゅうが無く、今思うと原爆を投下するためだったのではないかと思う。また、投下後、広島へ母と行って、にぎやかな広島がなく、恐ろしい遺体やいやなニオイがあったそうです。僕が1番ゾツとしたのは、母の「ここはダメだ。早く帰ろう」という事です。ここはダメだ・・・？ たった1か月前にはにぎやかな町だったのに？と衝撃を受けました。また、中西さん、本当は話したくないそうです。そりゃそうだ、そんな事など思い出したくないに決まっていると思いました。

帰りの新幹線で、思った事があります。

1つ目は、原爆を世界のどこにも投下させてはダメだという事。2つ目は、世界は平和を願っている人が多いのに、なぜ人は醜い争いをしてしまうのかという事。そして3つ目は、「平和都市」がもっと広がって、「平和県」「平和州」「平和国」のように広がっていき、地球全体が平和でうめつくされたら良いな、と思う事です。特に3つ目は、宣言をしてしまえば、戦争が起きることはないのでは良いと思います。衝撃を受けまくり、強い平和への心をつくってくれた広島3日間でした。



湖北台中学校 2年 古川 希

<戦争>

- ①国と国とが兵器によってたたかうこと。
- ②混乱や競争が多くの人をまきこんでこまらせている状態。

<原子爆弾>

ウランやプルトニウムなどの原子核の分裂の際に生じる大きなエネルギーを利用した爆弾。略して原爆。ピカドン。

第二次世界大戦の1945（昭和20）年8月、アメリカが、6日に広島、9日に長崎に投下した。

国語辞典で調べてみると、以上の事が載っていた。

戦後72年も経つと、戦争は、私達日本人にとって身近なものではなく、私にはどこか物語の中の出来事のように思えてしまう。今までの私の人生の中で、“戦争”というキーワードを身近に感じたのは、そう祖父が話してくれた戦争の話だけだった。

私のそう祖父は、第二次世界大戦中、日本の兵士として満州（今の中国東北部）に渡っていた。当時の出来事は、そう祖父の中で、強烈に忘れられない記憶として刻み込まれているらしく、何十年たった後も事あるごとに、私たち家族に繰り返し話していた。そんなそう祖父は、5年前93歳で亡くなった。

そんな中、私は初めて広島の地を訪れた。

広島では、いろいろな物を見た。

『弟の形見の弁当箱』

広島平和記念資料館に展示してあったそれは、真っ黒に焦げていた。説明文には、そのお弁当を持っていたのは、加納恒治さんという方の弟さんで“自分が弟に帰れと言ったから、弟は広島に帰り、被爆した。今でも加納恒治さんは、自責の念に駆られている”というような事が書かれていた。

私は、何とも言えない気持ちになった。広島に帰るよう弟を突き放してしまった加納恒治さん。その言葉に従い、たまたまこの日広島に帰ってしまった弟さん。加納さんは悪くないのに…。悪いのは“戦争”“原子爆弾”なのに…。ずっと苦しんでいる加納恒治さんを思うと胸が痛んだ。

『地球平和監視時計』

この時計には、広島への原爆投下からの日数と、最後の核実験からの日数が表示されていた。その下には15個の歯車の装置がついており、1番上の歯車は、世界の危機的状況の深刻化によりスピードを速め、1番下の歯車まで速さが伝わると、装置そのものが自壊するというものだった。このままいけば人類が破滅に向けての「刻限」を刻み続けることを暗示的に警告している歯車装置。歯車は3つ目まで回っていた。そして、最後の核実験からの日数、8月5日現在『330』が示されていた。

世界の核兵器保有国と保有数は、ロシア約7,290発、アメリカ約7,000発、フランス約300発、中国約260発、イギリス約215発、パキスタン約110～130発、インド約100～120発、イスラエル約80発、北朝鮮約10発。

国連で、2017年7月7日に採決された“核兵器禁止条約”。この条約には、核兵器保有国は交渉に参加しておらず、加入しない考え。そして世界唯一の被爆国である日本も、加入しない見込み。

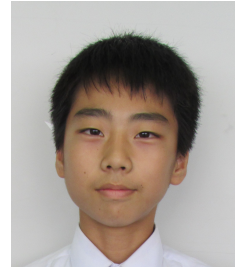
自国の利益だけを考え、他国に対し優位であろうとする考え…。世界が危機的状況になる前に、世界がその愚かさ気づいて欲しい。“地球平和監視時計”が壊れる前に。

第二次世界大戦が終戦してから72年も経つと、被爆者も高齢になり、日本人の原爆に対する関心も薄れてきているように感じる。式典で周りを見渡しても、日本人は、私達のように、学校や自治体単位での団体に参列している人はいても、個人で参列している人はあまり見かけなかった。反対に、外国人は、個人で参列している人を多く見かけ、核に対する関心が高いということを感じた。

唯一の被爆国である日本には、核の恐ろしさを世界中へ伝える義務があると思う。そのためにはまず、日本の戦争や核の関心が薄れつつある私達若い世代へ、戦争や核の恐ろしさを浸透させる必要があると思う。私に出来る事はとても小さな事だけれど、私が広島を訪れて感じた戦争や核の恐ろしさを、身近な人達、学校や報告会で伝えていきたい。

父がいて、母がいて、姉がいて、祖父、祖母がいる。おいしい食べ物を食べる事が出来、住む所も衣服もある。学校に行く事が出来て、先生がいて、友達もいて、たくさん勉強をする事が出来て、苦手な運動もする事が出来る。そして大好きなピアノを弾く事が出来る。

今ある『何気ない日常がいつまでも続くように』私に何が出来るのか、考えて行きたい。



久寺家中学校 2年 吉田 直輝

僕は今回の「広島市派遣事業」を通して、広島に落とされた原爆の威力・被害の大きさを知り、その被害にあった被爆者が心身共につらかったことを知ったので、この派遣事業をきっかけに学校に原爆の恐さを伝えていきたいです。

「原爆被害の概要説明」では、広島での原爆の被害と原爆の効果が説明されました。その年の12月31日までの犠牲者は13~15万人で、中でも建物疎開作業をしていた小中学生が多く被害に遭いました。また、日本人だけでなく外国人も被害に遭っているので、原爆の恐さがよくわかりました。また、日本の戦争のせいで子供たちや外国の人まで犠牲になっているのですごくかわいそうだなと思ったし、戦争もしない方がいいと思いました。その後の「慰霊碑ガイド」で僕は地球平和監視時計を見て「最後の核実験からの日数」が365日にいたっておらず、まだ1年たっていないことにすごく驚きました。それと同時に、広島市はこんなに核兵器廃絶に向けて頑張っているのに、なんでそれに協力してくれないんだろうと思いました。「おりづるタワーの見学」では、最上階から「爆心点」を見ることができました。それまでは「旧島病院」とか「相生橋から南東にずれた」とかの情報を聞いただけで、地図で確認していなかったので、詳しい場所が知れてよかったです。

2日目は「平和記念式典」に参列しました。僕は市長の随行者として参列したので、人生に1度しかない貴重な体験をすることができて、すごくうれしかったです。式典では、広島市長の他、安倍首相も話していて国全体で動いていたので日本ってすごい国だなと思いました。「袋町小学校見学」では、黒くなった壁を黒板変わりにして家族を探す伝言が書いてあったので、家族に会えない人達がいてすごくかわいそうだなと思いました。「本川小学校見学」では、溶けたガラスびんが一番印象に残っています。ガラスが溶けてしまう温度をはるかに超えてしまうほど原爆の熱線が強いことを知り驚きました。また、中に水が残っていることにもすごく驚きました。「平和記念資料館見学」では、僕は原子爆弾のしくみや威力、与える影響などを調べました。原爆は、空中でさく裂した後、中心温度が数百万度の小型の太陽とも言える火球を作りました。そしてその火球は、発生から1秒後には半径200mを超える大きさとなり、爆心地周辺の地面の表面温度は3,000~4,000度に達したそうです。さらに原爆のさく裂の

瞬間、爆心点は数十万気圧という超高圧となり、まわりの空気が急激に膨張して衝撃波が発生しました。爆心点からの爆風が外へ広がるにつれて、爆心点付近の圧力が大気圧以下に下がり、内側への吹き込み状態が起きました。この爆風では約2 km 先の本造の建物にも被害が及んだそうです。原爆はこれらの他に、最も強力な放射線というしくみをそなえていました。爆発時に出てくる初期放射線は非常に強力で、爆心地から1 km 以内にいた人々はそのほとんどが数日のうちに亡くなりました。地上に達した初期放射線にあたった物質は放射性物質に変化し、爆発後に爆心地付近に来た人々に被害を与えました。さらに、気体となり上昇した放射線物質は黒い雨となって地上へ降りました。

3日目の「被爆体験講話」では、上に書いた原爆の影響を実際に体験した方から話を聴きました。話をしてくれた中西さんは「本当は思い出したくないと思っているけど、未来にこのことを伝えなきゃいけないから話す」と言っていて、話すのが辛いのに僕達のために話してくれてすごくうれしかったし、ありがたかったです。最後に服部さんが「核の傘の下にいる日本」について話をしていたので調べてみたところ、日本がアメリカの傘の下で暮らしていることがわかりがっかりしました。さらに日本政府は「核兵器禁止条約」という条約に賛成するどころか反対しているんです。僕はこれを知って、安倍首相をひはんしている人々の気持ちが少しわかりました。今思うと式典の時に国全体で核廃絶に向けて取り組んでいるすばらしい国だなと思っていた自分が悲しいです。

でも、たとえ条約に参加していなくても僕達でできることはたくさんあると思います。今回の「派遣事業」でも、自分が感じたことを学校に持ち帰り、学校全体で核兵器の恐さに関心を持ってもらえればそれで十分だと思います。なので、これからは今回の派遣で感じたことを周りの人に伝えていきたいと思います。



久寺家中学校 2年 中島 未菜

派遣中学生として広島に初めて行き、私は原子爆弾の恐ろしさを実感することができました。

広島に着き、電車から降りてまず暑さに驚きました。そして少し歩くと、周りにたくさんの高層ビルがあることに驚きました。

1日目の初めは、中高生による原子爆弾被害の概要説明でした。何で広島に落ちてきたのか、原子爆弾は何でできているのかなどを知り、原子爆弾の強さを感じました。次の慰霊碑ガイドでは、供養塔や韓国人慰霊碑などを見ました。供養塔にはまた810人の骨があると聞き、まだそんなにたくさんの人が今でも家族に会えていないんだと思うと、自分がすごく幸せ者だと思いました。

2日目、平和記念式典に参加して初めて広島市長の言葉や平和の誓いなどを聴きました。「広島には、当たり前前の日常があったのです」という言葉に鳥肌が立ち、ずっと頭に残っています。当たり前前の日常は、なくなって初めて気がつくものだと思います。この先、いつまた原子爆弾が落ちてくるかわかりません。いつ当たり前前にあった日常がなくなるかもわかりません。だから、1日1日を大切に生きていこうと思います。次に袋町小学校の記念資料館の見学をしました。その資料館の壁には、たくさんの人々が書いた伝言がありました。その頃のものが今でも残っているなんてすごいなと思いました。次に本川小学校へ行きました。展示されているものの中に、72年前の水が入っている原子爆弾でつぶれたビンがあり、驚きました。100年後も水が同じ量入っていたらすごいと思います。また、壁にさびている鉄の金具がありました。それも被爆する前からあったものと聴き、驚きました。次に、平和記念資料館に行きました。そこで、やけどをした人の写真を見ました。男の人か女の人かもわからないくらい真っ黒で、胸がすごく痛くなってもう見たくないと思いました。でも、これが現実だから目をそむけたらだめなんだと思いました。少し歩いた所に絵本を動画にしたものを見ました。「助けてあげられなくてごめんなさい」とくずれた家の中にいる傷だらけのこの手を握っている絵がありました。この手を握っている子はすごく辛い思いをしたんだなと思いました。でももし私がそこにいたとしたら、見て見ぬふりをしていたと思います。

3日目は、被爆体験講話の聴講をしました。その頃は、1、2年生は学校に行っていたけれど、3年生からは働かされていたそうです。だから、今私達が学校に通えることや、授業を受けられることは、とてもありがたいことだから、もっと感謝の気持ちをもとうと思いました。また、熱線ややけどで亡くなった人だけではなく、疎開児童だったから助かった人も、家族がいなくなると、住む所、着る物、食べる物がなくなり、飢えで死んでしまったり、家族を探しに被爆した所に行くと、放射線をたくさんあびてしまうため、その影響で死んでしまう人がたくさんいたそうです。この話を聴いて、生き残った人は、そんな辛い環境の中ですごく頑張ったんだなと思いました。また、その少ない人数で広島をあそこまで復興させるって本当にすごいと思いました。

「平和の原点は、人間の心と心のふれあい。結局、戦争は、一人一人の心の中に平和なことを願わないと平和にはなれない」

と被爆者の方がおっしゃっていました。私もそう思います。みんなが平和がいいなら、戦争なんて起こりません。戦争が起こるとたくさんの方が亡くなってしまいます。たくさんの方が悲しみます。みんな不幸になるだけです。それに、被爆した人は、すごく辛い経験をしたのに、それを言葉にして誰かに伝えるということをしています。原子爆弾のことは思い出だけでも辛いと思います。ですが、そのことを自分が辛い思いをしてまで伝えるということは、もうこのようなことは二度とあってはならない、これ以上悲しい思いや苦しい思い、辛い思いをする人を増やしたくないからだと思います。だから、原子爆弾のことを知らない人達に核兵器の恐さ、恐ろしさなどをわかってもらいたい。あの日、あの場所であった現実をしっかりと目に焼きつけてほしい。何の罪もない人々が簡単に殺されていく辛さを。美しい自然があった広島が地獄に変わっていく様子を。命の重さ、尊さ、生きていることの奇跡、感謝を忘れないで、世界中の人々が笑顔で、楽しく、平和で暮らせる未来を創っていききたい。



白山中学校 2年 瀬戸 大晴

私は今まで原爆という物を深く考えた事がありませんでした。怖い物。危ない物。すごい被害を人々に与えた物。それ位の抽象的な考え方しか持っていませんでした。しかし、今回の広島市派遣事業を通して、原爆の威力や被害、恐ろしさを教わりました。

原爆は熱線と爆風、放射線が複雑に作用して威力を発揮するそうです。熱線は爆心地周辺を 3,000~4,000 度にして人々に火傷を負わせ、爆風は人々や建物を吹き飛ばし、放射線は吐血や脱毛、白血病やがんで人々を苦しめました。これにより、投下当時広島には約 35 万人の人々がいたそうですが、昭和 20 年の終わりには死亡者が 13 万~15 万人にもものぼったそうです。また、原爆投下時に広島に居た約 35 万人の中には、朝鮮半島出身や中国出身者、東南アジアの出身者も居たそうです。原爆はそんな 35 万人を苦しめ、また、その方の親族や友達などを悲しみに落とし入れたのです。

原爆は広島町にも被害を及ぼしました。広島町を一晩中真っ赤にし、焼き尽くしたのです。そのせいで、広島町には何も無くなってしまいました。鉄筋コンクリートで出来ていた建物の残がい以外、まっさらになってしまったそうです。

このように、広島町に居た人も、広島町にあった建物も、原爆は広島町にあった何もかもを消してしまったのです。私は我孫子市の何もかもを消されてしまったとしたら、私はもう無い我孫子市のことを思い出したくないでしょう。しかし、被爆者の方々はそんな思い出したくもないであろう苦しい思いを語られているのです。二度と同じ事が起きないように。私は生き残った人々にそんな力強さがあったから、今のように広島町は何もなくなってしまった所から復興出来たんだらうと感じました。

原爆の被害は学童疎開をしていた子ども達にもありました。学童疎開をしていた子ども達は山奥の方で避難していたので、直接の被害はなかったそうです。しかし、原爆の投下で両親が死んでしまった。親戚も死んでしまった。という身の拠り所が無くなってしまった原爆孤児が一気に 6,000 人程生まれました。彼らは歩き回り、原爆ドームの中にも居たそうです。そして彼ら 6,000 人のうち、1,500 人程が寒さや病気、飢えで死んでいったといひます。

やはり原爆は直接被害を受けた人だけでなく、その人の周りの人々の心も傷つけます。だから原爆が与える傷は計り知れない程大量なのです。原爆1つが多くの体と心を傷つけてしまうのです。

その後、被爆者の方々は放射線の後障害というものに苦しみます。1年後位からはケロイドと呼ばれるものが出来る人が出てきたそうです。このケロイドが顔に出来て自殺した人もいるそうです。また、突然がんや白血病と呼ばれる血液のがんが発症したりする人も居て、今でもこれらに被爆者は苦しめられているそうです。これらの症状はいつ発症するか分からず、突然なので被爆者はどうなるか分からない。と、差別が生まれてしまいました。

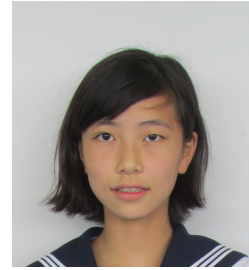
このように原爆は、被爆者を死ぬまで不安にさせます。苦しめます。とても思い出したくもないであろう思い出を作り、それを二度と他で使わせてはいけないという気持ちから、その思い出を思い出させ、その上死ぬまで病気との恐怖を味あわせるのです。

1日目に行った、広島中高校生ピースクラブの原爆被害の概要説明の最後に、「人類と核兵器は共存出来ない」と述べられていました。まさにその通りだと思います。現に脅しとして使っている国があるわけです。もう一度原爆を使ってしまうと、多くの人々の傷を与えるのです。

3日目に聴かせてもらった中西巖さんの講話で、8月6日の朝、広島行きの電車は建物疎開へ行くために勤労奉仕服を来た中学生でいっぱいだったそうです。当時建物疎開作業をしている中学生は約8,000人だったと言われています。この疎開作業をしていた中学生約8,000人のうち、約6,300人が亡くなったそうです。中西さんは、8月6日の朝、広島駅へ向かう電車を「地獄行きの電車だったんでしょうね。」と表現しました。私がこの言葉を聞いた時は重い衝撃を受け、今でも強く印象に残っています。

中西さんは最後に「平和の砦を築く事が大切」とおっしゃっていました。どんな政策であろうと、平和を1番に考えて行うのが大切だ。少しでも平和になるように努力して欲しい。という風なことを言いたかったのだろうと私は感じました。

私は何も被害を受けていません。しかし、自分のつらく苦しい過去と戦いながら多くの人へ原爆の恐ろしさを伝えている人が大勢います。だからこそ、何も被害を受けていない私達はこれを忘れてはならないと思います。



白山中学校 2年 豊田 香乃

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」平和記念公園の原爆死没者慰霊碑に刻まれた言葉です。広島を訪れた人が手を合わせ、平和を願う場所として建てられています。

平和記念公園は原爆投下前に人々が日常を送っていた場所でした。その事を思うと、それだけでとても悲しい気持ちになります。尊い命を一瞬にして奪われた方々、ご家族、助けてあげることもできずその惨劇を目の当たりにした方々の思いを強く感じる場所です。私は祈ることしかできませんでした。

以前、私は広島に家族で訪れたことがあります。私はその時小学3年生でした。小学3年生の私は原爆への関心があまりなかったので、その時にみた原爆ドームと原爆の子の像しか記憶に残っていません。今回、中学生の私は、我孫子市の代表派遣団の一員として、様々な催しや、平和記念式典に参加し、石碑の言葉の思い、平和を願う気持ちを強くもつようになりました。思っていたよりも小さかった原爆ドームや、火傷・ケロイド・紫斑が出た人の写真、原爆の子の像に寄せられた平和を願うたくさんの折り鶴。見たり、触ったり、聴いたりしたこと、全てが印象的なものでした。

その中でも、印象に残っているのは中西巖さんの被爆体験講話の聴講です。中西巖さんは、被爆した当時15歳の少年でした。中西さんは学校に行かず、陸軍被服支廠で勤労奉仕をしていました。その頃は食べ盛りでしたがご飯も満足に食べることはできなかつたそうです。その時、少ない食糧なのに自分で食べさせてくれる母親を申し訳なく思い、軍隊に志願し、飛行機乗りになりたいと思いました。結果は、1次試験は採用されたそうですが、2次試験では採用されなかつたそうです。その頃は、どうせ自分は20歳になったら兵隊に行き、戦争をしなくてはならない、と思っていたので自分の事よりも家族のことを考えて動くことが多かつたそうです。空襲では、何も被害がでなかつた広島。それは原爆実験をした時に結果がわかりやすいように綺麗に残しておいたのだろうと語ります。約600メートル上空で原爆が投下される数時間前、その日はトラックで爆心地近くまでいく予定でしたが、なぜかトラックの迎えが来なかつた為、いつものように働いていたそうです。もし、その日にトラックが迎えに来

ていたら、自分は死んでいたかもしれないと、命拾いをしたそうです。仕事場は爆心地から 2,670 メートルのところであり、被爆直後は竜まきに巻き上げられる感じがし、その後の記憶はないそうです。しかし、意識をとり戻し目を開けてもきのこ雲の下だった為、けむりで周りは見えません。自宅は爆心地から 5 キロメートル先にあったので、壊れることもなく、家族は全員無事でした。中西さんが家に帰宅したのは数時間後だったので、ご家族はすでに中西さんは亡くなっていると思い、帰宅した時は驚き、とても喜ばれました。その後 4 年間にわたる太平洋戦争で敗戦し、「助かった」と内心嬉しかったそうです。しかし、9 月半ば、中西さんは発熱をし、フラフラし始めます。中西さんは幸い死に至ることはありませんでしたが、発熱後にはぐきから血がでたり、髪の毛がぬけるなどして、血を吐いて亡くなる人もいたそうです。他にも、何年後かになって、治った火傷の跡が膨れあがり、治らなくなるケロイドになってしまい辛さのあまり自殺したり、何の異常がなくても、被爆は何があるかわからない、と差別され、つらい思いをする人は少なくありませんでした。「平和の原点は人偏の心と心のふれあいです」中西さんは、そうおっしゃいました。平和は差別のように心と心のぶつかり合いで簡単にくずれてしまうものです。中西さんがおっしゃっていたとおり、やさしい心と心のふれあいが重要だと思います。

国連で「核兵器禁止条約」が採択されました。そして、北朝鮮とアメリカの関係も悪化し、広島・島根・高知の上空を通りグアムへ向けてミサイルを発射すると発表しました。72 年前の悲惨な出来事を、何ひとつ得ることのできなかつた戦争を、長きに渡り被爆者の方々が訴えられてきた思いを、私達も訴えていかなければならないと思います。